

翻  
訳

## 第二次世界大戦下の日本とスペイン関係と 諜報活動 (一)

ゲルハルト・クレープス

田嶋 信雄・井出 直樹 訳

- 一 スペイン内戦勃発から防共協定加入へ
- 二 ヒトラーの外交政策構想における日本とスペイン
- 三 スペインと太平洋戦争——協力の時期(以上本号)
- 四 一九四二年における戦争の転換とスペイン
- 五 フィリピン問題
- 六 フランコの和平仲介努力
- 七 日本とスペインの断交
- 八 一九四五年以後の日本とスペイン

### 一 スペイン内戦勃発から防共協定加入へ

一九三六年のスペイン内戦勃発直後、スペイン反乱派の国民戦線評議会は、日本政府に外交的な承認を要求して

きたが、当時スペインの政治情勢はなおあまりにも流動的だったため、この対日交渉の試みは、当面日本政府により無視されることとなった。<sup>(1)</sup> また、東京駐在スペイン公使およびスペイン総領事は国民戦線派を支持すると表明したが、<sup>(2)</sup> そのことがまた事態を一層複雑にする原因となった。つまり、日本政府にとって、日本に駐在するスペイン外交官達は、さしあたり法的にはたんなる私人にすぎなくなったからである。<sup>(3)</sup> しかし一方、日本政府は、ポルトガル駐在日本代表部を通じて、反乱派政権との非公式なコンタクトを維持していた。日本政府は、確かに、一方ではスペイン共和国の新しい代表であるデ・カステイジョの信任状を受領したが、他方では、以前からのスペイン公使館の明け渡しを拒否していた。こうした矛盾は、当時の日本政府が直面していた政治的矛盾を表現していたといえよう。<sup>(4)</sup> 内戦勃発直後、スペイン駐在日本公使矢野真は南フランスのサン・ジャン・ド・リューズに移り、そこから公使としての任務を遂行した。他方、公使館二等書記官高岡禎一郎は、一〇月までマドリッドに留まった。<sup>(5)</sup>

一般的に言えば、日本政府は、スペインのフランコ派に政治的なシンパシーを抱いていたといえよう。というのも、共産主義およびその背後にあるソ連に対しフランコ派が発した闘争宣言は、一九三六年一月の日独防共協定締結に至る日本の仮想敵のイメージに合致していたからである。<sup>(6)</sup> 日独防共協定の調印に際し、スペイン内戦は、コミンテルンとソ連の陰謀の産物と喧伝され、大きな役割を演じることとなった。<sup>(7)</sup> 日独防共協定の調印直後、ドイツ政府と歩調を合わせて日本政府がスペイン国民政府を承認するという噂が流れたのも、別段驚くにはあたらない。<sup>(8)</sup> 実際、スペイン駐在ドイツ代理大使、ヴィルヘルム・ファウベル将軍は、当時、防共協定へのスペインの加入を提言していた程である。ただし、この提案は、ドイツ外務省によりさしあたり拒絶されていた。<sup>(9)</sup>

一九三七年まで、事態はそのまま推移する。一九三七年一月、イタリアが防共協定に加入し、一二月、日本政府はフランコ政権を公式に承認した。当時、日本は、日中戦争の勃発により国際的な孤立感を味わわれていた上、ドイツおよびイタリアがスペイン内戦に軍事介入したことから、スペインではフランコ派が勝利する可能性が

大きくなったと判断していたのである。加えて日本は、スペインへの軍事視察団の派遣を通じて、ヨーロッパ諸大國——とりわけ主要な仮想敵国であるソ連——の最新の戦略構想および軍事技術の進歩に接することが出来ると考えていた。<sup>(10)</sup>

日本がスペイン国民政府との外交関係を樹立したことにより、もう一つの利点もたらされた。つまり、フランスが、その対価として、国際的な孤立状態にあった日本の傀儡国家——満洲国を承認したのである。

一九三九年初頭、スペイン国民戦線派の最終的勝利が目前に迫ると、ドイツ・イタリア・日本の三国は、フランス派に対し、防共協定に加入するよう猛烈な圧力を行使し始めた。スペインはこれに対し当初抵抗を試みた。当時英仏など西側諸国は、もともとは反ソ連であった日独伊三国の同盟網が、実は同時に西側諸国自身にも向けられていると感じていた。このためスペイン政府は、もしスペインが防共協定に加入した場合、こうした西側諸国がスペインに対し非難を強めることを恐れていたのである。

一九三九年三月、フランスは譲歩し、防共協定に調印した。しかしその際フランスは、防共協定への加入を当面秘密扱いすることにより、自己の立場を保持しようとした。<sup>(11)</sup> にもかかわらず、その後まもなく、スペインの防共協定加盟を伝える国際的なニュースが広まってしまった。これは恐らくドイツが流したものと思われる。結局、一九三九年四月、フランスのマドリッド進攻によりスペイン内戦は終了した。その一か月後、スペインは、日独伊になり、国際連盟から脱退した。

このころ日独伊三国は、防共協定強化のための交渉を行っていた。予定された三国軍事同盟にスペインが加入する可能性も濃厚となってきた。とりわけイタリアは、スペインの加入により、将来の戦争に際し、イギリスを地中海から、フランスをアフリカから閉め出すことが可能であると考え、この計画を推進していたのであった。<sup>(12)</sup>

しかしこうした構想は、あたかも砂上の楼閣のごとく潰え去ってしまった。ヒトラーが、一九三九年八月にスタ

ーリンとの間で独ソ不可侵条約を締結したからである。これは、同盟国に対するドイツの裏切りであった。特に日本とは、防共協定付属秘密議定書の中で、ソ連との将来の条約締結の可能性を明確に否定していたのである。

## 二 ヒトラーの外交政策構想における日本とスペイン

独ソ不可侵条約締結により、ドイツは、日本とスペインを結ぶ架け橋としての機能を失った。さらに、ドイツが一九三九年九月一日にポーランドを攻撃して第二次世界大戦に突入すると、日本・イタリア・スペインには大きな衝撃が走った。なぜなら、彼らはポーランドを、自らの陣営、つまり反ソ陣営の一員と見なしていたからである。

加えてスペインは、カトリック国家であるポーランドに対する奇襲攻撃に非常な衝撃を受けた。スペインは中立を宣言し、日本も、スペインほど明確ではないにせよ中立の立場をとった。これに反し、イタリアは、国際法には存在しない「非交戦」なる立場を選択し、待機主義の立場に固執した。これによりイタリアは、西側諸国の譲歩を引き出そうとしたのである。

ソ連による東部ポーランドの占領に関しフランコは「ヨーロッパのアジア化」<sup>(13)</sup>の始まりとの烙印を押し、ソ連のフィンランド攻撃ののちは、ドイツとその敵国に対し講和締結を迫り「アジア的野蛮に西方への扉を開けないよう」<sup>(14)</sup>求めた。

一九四〇年始めにドイツがデンマークとノルウェーを占領するのみならず、オランダ、ベルギーおよびフランスをも征服すると、情勢は根本的に変化した。それによりイギリスの降伏、あるいは少なくともドイツの条件を受け入れたうえでの和平締結が目前に迫ったかに見えた。イタリアは対フランス戦の最終局面で参戦した。そして日本とスペインも、ドイツ国防軍の勝利の尻馬に乗ろうとした。

六月一〇日のイタリアの参戦直後、スペイン政府はムソリーニの勧めにより中立を放棄し、イタリアの例になら

つて「非交戦」を宣言した<sup>(16)</sup>。それによりスペインは、枢軸側の一種の「準同盟国」として登場するに至ったのである。二日後、スペインは永世中立の国際都市タンジールを占領し、一月、それを事実上スペイン領モロッコに編入した。それと並行して、スペインは、対英戦参加を準備した。目前に迫る対英戦の最後の二週間に参戦し、それにより来るべき講和会議での議席と発言権を確保しようとしたのである<sup>(17)</sup>。フランコはまず独仏休戦を仲介し、ジブラルタルおよび北アフリカに対する権利を主張し、さらに將軍の一人をベルリンに派遣して取り決めを行おうとした<sup>(18)</sup>。しかしヒトラーの対応は冷やかであった。

同様に日本も、ドイツの同意の下で、ヨーロッパ諸国の植民地を——さしあたりフランス領インドシナとオランダ領インドシナを、しかし長期的にはイギリス領各種民地を——横取りしようと決意していた。これによりすでに始まっていた戦略思考の転換過程が強力に促進され、日本はもはやソ連を主要な敵国とは見なさなくなったのである。こうしたアジアにおける戦利品への誘惑とともに、赤軍との国境紛争での敗北と独ソの和解が日本の思考転換の要因として作用した。独ソ和解により、東京—ベルリン—ローマ—モスクワの間での反アングロサクソン利益共同体を形成することが可能になると考えられたのである。日本は、したがって、ふたたびドイツへの接近を試み、そのためにわざわざ内閣も交代した。

しかしヒトラーは日本政府に対しても冷やかな態度をとった。というのも、ヒトラーは、イギリスがそのうち降伏するだろう、あるいは、少なくとも交渉に応じるだろうと考えていたからである。彼は、講和会議に自分勝手な要求を出して混乱を招くにすぎない「火事場泥棒」を拒否した。ヒトラーにとっては、すでにイタリアさえもが攪乱要因として作用していたのである。

こうした提案、とりわけスペインの好意的提案に対しヒトラーが躊躇したことが、第二次世界大戦においてヒトラーから勝利のチャンスを奪ったといえるかも知れない。イギリスに講和の用意がなく、逆に、とりわけ空戦の展

開で明瞭に示されたように、イギリスがドイツに比べますます強力になっていくことが明らかになった時、初めてヒトラーは外相リッペンントロップおよび軍人達の主張する考えに従う姿勢を示した。彼らは、スペイン・フランス（ヴェシー政権）・ドイツ・イタリア・ソ連・日本からなる反アングロサクソンの大陸ブロックを形成し、イギリス帝国を側面攻撃してイギリスを屈伏させる構想を抱いていたのである。その際両翼に位置するスペインと日本に特別の重要性が与えられた。なぜなら、イギリス帝国の植民地の最重要拠点ジブラルタルとシンガポールは、場合によってはこの両国により占領されなければならなかったからである。

強力な軍事力を有する極東の帝国日本とは異なって、長期にわたる内戦で疲弊し、経済的にも停滞したスペインの価値は、その地政学的な位置の中のみ存在した。しかもこの好条件は、ドイツ軍の派遣によってのみ利用しうるにすぎなかった。

このためドイツは一九四〇年秋に慌ただしく活動を展開し、九月二七日に日本およびイタリアと三国同盟を締結するのである。この同盟はアメリカに対する防御同盟であった。三国はアメリカがイギリス救援のため介入するのを恐れ、三国同盟締結によりアメリカに中立を強制しようと考えたのである。

加えて、条約締結国による世界的規模での勢力圏の確定がなされ、また、ドイツは日本に、ソ連との和解のため、仲介の労をとることを約束した。一方、こうした同盟構想にスペインを加入させることは至難であるように思われた。なぜなら、この同盟構想にはソ連の参加が想定され、また、中東およびインドにおける反英行動が督励されることになっていたのである。このため、ドイツとイタリアは、三国同盟とは別の個別的同盟をスペインと締結しようと試みた。

スペイン内相でフランコの義弟でもあるセラノ・スニエールが九月にドイツとイタリアを訪問した。彼はのちに外相となる人物であり、また、枢軸への接近を熱狂的に説く人物でもあった。彼はスペインの参戦に対する代価

を提示した。軍事的・経済的支援のほかに、ジブタルとフランス領モロッコ、アルジェリアおよび西アフリカにおけるフランス領植民地の一部の割譲がそれであった。

ドイツとイタリアにはこの要求は過大であると考えられた。イタリア自身がフランス領北アフリカに対する併合計画を抱いていただけでなく、こうした過大な要求は、枢軸側の一種の「準同盟国」であるヴィシー政権下のフランスを激しく動揺させる可能性が大であった。加えて、ヴィシー軍が、セネガルにおけるイギリス軍・ドゴール軍の大規模な上陸作戦に流血の反撃を行ったばかりであった。したがって、アフリカでの対英防衛のためには、軍事的に弱体なスペインよりも、枢軸側に立つフランスのほうがはるかに価値があると思われたのである。さらに、モロッコとカナリア諸島で軍事拠点を割譲せよというドイツの要求は、スペインとの重大な緊張関係をもたらした。他方、アメリカの経済的禁輸が予想されたため、フランスはドイツにとりわけ穀物と燃料の分野での広範な援助の提供を要求したが、このフランスの要求は、一度として実行されることがなかった。

にもかかわらず一〇月にドイツは「フェーリクス」作戦、すなわちスペイン領土からジブタルを攻撃する計画を準備した。<sup>(19)</sup> イタリアはスペインの三国同盟参加をフランスに提案するようドイツを促した。<sup>(20)</sup> それにより日本とスペインの結びつきも形成されるはずであった。

ヒトラーは賛成し、来るべき仏西国境でのフランスとの会談でこの考えを自ら提示すると約束した。<sup>(21)</sup> この会談でヒトラーは、スペインの諸要求を妥協により値引きさせるつもりでいたのである。一〇月二三日にアンダイ駅での会談がもたれた時、ドイツ側は、ヴィシー政権を顧慮すれば過大な領土割譲を認める訳にはいかないとする一方で、イギリスに勝利した暁には、イギリス領植民地を処分してフランスに代償を与えられるから、スペインの領土要求に関する調整がなお可能であろうと主張した。フランスはこれを不確実なものと考えたが、最終的には秘密議定書で一九三九年五月の独伊鋼鉄同盟への参加を宣言した。さらに、戦争準備に必要な軍事的支援を得ることを条

件に、他の条約締約国との間でタイムリングを確定したのち、戦争に参加するという意思を宣誓した。加えて、三国同盟へ加入することが予定されたが、「その日時は各国の間での合意による」ものとされた。<sup>(22)</sup>

これにより日本は将来の同盟国を得たことになるのだが、日本はその存在について何ら知ることがなかった。フランコは何らの義務をも負うことがなかった。ヒトラーとの会談の直後、セラノ・スニエール外務大臣は、日本公使館一等書記官藤井慶三に、次のような趣旨のことを述べた（日本の公使に任命されていた須磨弥吉郎はまだ着任していないかった）。「まだ若干の問題が残っているので、アンダイ会議の詳細について話すことは出来ないが、もし問題が解決すれば、私は枢軸国としてのスペインという立場からあなたとお話することが出来よう。しかし私は、会談の成果として、ドイツとスペインの協力がより密接になったと断言出来る。ただ、スペインは即座に戦争に突入するのではなく、事態の推移をもう少し見守りたい<sup>(23)</sup>」。その直後にイタリアがギリシア・エジプト攻撃で重大な敗北を被ったため、ジブラルタルの重要性が一層高まった。もし枢軸側がジブラルタルを占領するならば、イギリスを地中海から閉め出すことが出来るからであった。

しかしながら、ドイツとイタリアがスペインにジブラルタル奇襲攻撃を迫れば迫るほど、フランコは、ますますイギリスに有利に展開する情勢およびアメリカへの経済的な依存関係を考慮し、参戦への意欲を減退させていくのだった。けれどもスペインは、スペイン領海において潜水艦隊をも含むドイツの軍艦の補給を許可し、かつ枢軸側の多くの諜報員に対し可能な限り協力することなどで、すでに早くから戦争への貢献を行っていたのである。

しかしヒトラーはそれ以上のことを要求していた。彼は、ジブラルタル占領と沿岸防衛を支援するため、スペインにドイツ国防軍を進駐させる期限まで設定したのである。それは一九四一年一月一〇日と決められた。しかし二月、フランコはヒトラーに、近い将来スペインが参戦することはないと宣言した。<sup>(24)</sup> ヒトラーが急いだのは、翌年春に予定していた別の軍事計画のためであった。ギリシアにおけるイタリア軍を救出するためのバルカン作戦と対



ソ攻撃がそれである。ヒトラーの理屈によると、電撃戦争によりソ連を打倒すればドイツの立場が強化され、イギリスは最終的には和平に應じる筈であった。イギリスを地中海で叩くというもうひとつの構想は、ドイツ海軍のみならずイタリアと日本によつても支持されていたため決して放棄されたわけではなかったのだが、対ソ戦争の後景に隠れてしまう結果となつた。

以後も数年間ヒトラーはフランコに圧力を行使し、スペイン内戦でのドイツの支援に対する見返りを要求することとなる。しかしながら、実行不可能なスペイン政府の要求、たとえばトラック二万台の提供などは、ほとんど拒否回答に等しかつた。一九四二年二月のヒトラー宛書簡の中でフランコは、かつてアンダイで作成された議定書は効力を失つたと見なす旨を通告した。<sup>(26)</sup>これによりフランコは、当時約束した三国同盟への加入を拒否したのである。しかしそれは最後の決裂の言葉を意味した。わけではなかつた。ことに、その直後にドイツはバルカン戦役、クレタ島占領、北アフリカにおけるイギリス拠点に対するアフリカ軍団の攻勢において、めざましい成果を示し得ていたからである。だが、三国同盟加盟を求める枢軸側の新たな提案に対しスペインはふたたび曖昧に回答しただけであつた。<sup>(27)</sup>

スペインと同様、日本も、イギリスへの攻撃、しかもシンガポール要塞への攻撃を求めるドイツの強硬な要求に抵抗していた。一九四一年春の松岡外相のベルリン・ローマ訪問に際しても枢軸諸国はこの要求を繰り返したが無駄であつた。確かに日本は相変わらず東南アジアへの膨張を目指しており、そのためソ連と中立条約を締結していたが、なおヨーロッパでの戦争の展開を見守つていた。スペインと同様、日本も、ドイツがイギリスを全面的な敗北に追い込めないことに失望していたのである。

ヒトラーの対ソ攻撃は確かに日本の背後における完全な自由を創り出した。しかしそれは、来るべきアメリカとの戦争の際に必要とされるドイツ国防軍の巨大な勢力を釘付けにした。七月の日本による南部仏印進駐およびそれ

に続くアメリカの経済禁輸は、戦争の可能性をいよいよ増大させた。このため日本政府は、秋にヒトラーの電撃戦構想が破綻したと思われた時、ドイツにソ連との単独講和を進言し、仲介を申し出た。ヒトラーはこれに同意せず、むしろ背後での自由を利用してシンガポールを攻撃するよう改めて日本に要求した。ヒトラーはなおドイツ単独でソ連を打倒し得ると信じていたのである。

スペインは独ソ戦争に対し日本とはまったく異なる反応を示した。スペインの主要な仮想敵国ソ連に対しついにドイツが戦争を開始したからである。フランコは、共産主義という野蛮に対しキリスト教と西洋文明を防衛すると称して闘われたスペイン内戦での勝利に、まさしく彼の支配の正統性を基礎づけていたのである。対ソ攻撃が開始されたその日にはやくもフランコはドイツに満足の意を伝え、義勇軍部隊の派遣を申し出た。ヒトラーはこの予想外の申し出を喜んで受け入れた。<sup>(28)</sup>こうして、秋に、ムニョス・グランデス將軍麾下のいわゆる「青の師団」が東部戦線に派遣されたのである。

### 三 スペインと太平洋戦争——協力の時期

日本の真珠湾攻撃もまたスペインで大きな熱狂を巻き起こした。スペインの報道機関は日本の初期の戦果を熱狂的に報告し、セラーノ外相は、枢軸側の勝利は確実であるとの希望的観測のもとに、祝電を日本政府に送った。<sup>(29)</sup>アメリカ合衆国はこれに対し著しい不快感を表明した。ドイツとイタリアは日本の攻撃の数日後にアメリカ合衆国に宣戦を布告した。かくしてイベリア半島へドイツ国防軍が進駐する可能性はいつでも存在することとなった。一九四二年一月初め、須磨大使との会談でフランコは、日本の軍事的成果について非常に喜ばしいとし、まもなくシンガポールも陥落するだろうとの確信を述べた。彼の心配は今となってはソ連だけだと語り、「ヨーロッパではソ連の存在は大きな問題である。ソ連は十分に準備を整えている。スペインか日本がソ連問題を解決しなければならな

いだらう、さもなければ手遅れになるだらう、と誰もが考えている。だから私はここ数週間、何回も閣議を開いてこの問題を協議している。戦争はあと二年以上続く見通しであり、それを考慮しながら前向きに今後の計画を立てなければならぬ<sup>(30)</sup>と述べた。

アメリカ合衆国はこうしたスペインの親率的な態度に憤激し、妥結寸前であったスペインとの経済交渉を中断して、事実上すべての石油供給を停止した。一九四二年一月にようやくアメリカの主張する条件のもとで解決がはかられた。すなわち、アメリカは規定量の石油を供給するが、枢軸側への再譲渡を阻止するため、スペインでアメリカ人が石油の配分を監視するというものである。そのうえスペインは、ドイツへのタンクステン輸出の制限を約束せざるを得なかった。ただ日本のみが、占領下の中国から、軍事経済に不可欠の原料であるタンクステンを供給することが可能であったが、戦争のため、それをドイツに輸送するのはほとんど不可能となっていた。残るのは、一応中立国とはいえ、イギリス側に傾斜していたポルトガルのみであった。

第一次世界大戦の時と同様、スペインは、多くの日本の敵国において日本の利益を外交的に代表する役割を引き受けた<sup>(31)</sup>。さらに、とりわけ諜報活動の領域でもスペインは援助を提供した。すでに枢軸諸国とスペインの間で、とりわけカナーリス提督率いるドイツ国防省防諜部の活動を通じて、密接な協力関係が成立していたことが日本に幸いした。カナーリス提督は第一次世界大戦以来、スペイン国内に優れたコネクションを維持していたのである。

真珠湾攻撃ののち、日本は、情報資料収集の回路を開拓するため、ドイツに援助を依頼した。この依頼はドイツ政府からセラノ外相へ伝達され、セラノはさらに、イギリスで諜報活動を行っていた一人のスペイン人諜報員に、アメリカおよびその他の地域で諜報組織を建設するよう指令した。この男、すなわちアンヘル・アルカサル・デ・ベラスコは、その直後にマドリッド駐在の日本公使須磨弥吉郎に紹介され、詳細な取り決めを行った<sup>(32)</sup>。

ここで若干ベラスコの過去を振り返ってみる必要がある。ベラスコは非常に貧しい環境のなかに生まれ、闘牛

士として社会的な上昇を果たした。その後彼は学校に通い、さらに大学でも数年間学んだのち、作家・ジャーナリストとして活動した。一九三三年に彼は、フアランへ党の創立メンバーとなった。のちに反動主義に傾いたフアランへ党は、この当時はまだ国家主義的・社会革命主義的な政党であった。熱心な右翼急進主義者かつ確信的な反ユダヤ主義者であるベラスコは、スペインで活動するナチ党およびドイツ国防省防諜部の代表者達とすぐにコンタクトを形成した。防諜部は彼にドイツ国内で秘密諜報員としての教育を授けた。<sup>(33)</sup>ベラスコは本稿の筆者(クレープス)に次のような趣旨の話を伝えている。「私は一九三五年に『ラ・ナシオン』紙の戦時特派員としてエチオピアに赴いたが、それ以前から、ドイツ国防省防諜部、すなわちヴィルヘルム・カナリス提督指揮下の軍事諜報組織とコンタクトを有していた。まさしくエチオピア戦争に関する私の情報ゆえに、カナリスは私に直接の関心を持った。のちに私はベルリンでカナリスその人と会ったが、その時カナリスは、情報収集と機密情報伝達分野で私を訓練するよう防諜部に指示を与えた」<sup>(34)</sup>。

彼は活動的な闘士としてスペイン内戦に参加したが、反共和国陣営で闘われた権力闘争では敗者となった。一九三七年四月にフアランがフアランへ党と保守的・反動的諸組織との合同を強要し、党からその元来の性格を奪って自己の統制下に置いた時、古参指導部は抵抗した。その中にベラスコもいたが、逮捕されてしまったのである。<sup>(35)</sup>それに続く裁判では多くの死刑判決が下されたが、しかし執行は猶予された。国民戦線政府にドイツ大使として派遣されていたファウベル將軍はフアランへ党古参闘士を救うために行動し、介入した。そのことが執行猶予に影響したのかもしれない。ベラスコは死刑を免じられて終身刑にされた。<sup>(36)</sup>ファウベル自身はベルリンの外務省に次のような報告を行っている。「私はフアランコおよび側近たちに友好的な影響力を行使して、切迫していたフアランへ党古参指導者エディーリヤとその一派(この中にはベラスコもいた)への銃殺刑を阻止しようと努めた。とうとうフアランコは私に、恩赦により死刑執行を停止させると約束した」。この報告の中でファウベルは、たしかに勝者で

ある反動勢力もドイツに敵対的であるとは言えないが、有罪とされた者たちの方がドイツの利害にとつてははるかに有益であろうと強調している。<sup>(37)</sup> ベラスコも、本稿の筆者への回答の中で、ファウベルの行動がそのようなものであったと確認している。「ファウベルは彼の影響力のすべてを行使して、死刑判決を終身刑に変更するよう介入した。それはヒトラーの指示に基づくものであった。ヒトラーはカナリスを通して、私がドイツ国防省防諜部と協力していることを知っていた。ファウベルは死刑判決のち獄中の私に何度も電話をよこし、私を処刑しないとのフランコの約束を伝えて私を安心させた」。その他にもファウベルは、刑務所内におけるベラスコの優遇措置を認めさせた。<sup>(38)</sup> しかも二年もするとベラスコは自由の身となった。この減刑の決定的な理由は、ベラスコが、獄中共産主義者の大衆暴動を阻止するため国益にかなう役割を演じたからであるといわれている。<sup>(39)</sup> 他方、この恩赦は諜報活動への任用と関連しているというベラスコ自身の証言もある。<sup>(40)</sup>

いずれにせよ、その際、内務大臣兼ファランへ党書記長であったセラノ・スニエールが一枚噛んでいた。<sup>(41)</sup> セラノとベラスコは、以後も数々の領域で協力した。諜報員としての活動以外にも、ベラスコは、たとえば、セラノをファランへ党創設者ホセ・アントニオ・プリモ・デ・リベラの理想的後継者として擁立するという宣伝活動をも行った。しかしそもそもセラノは、カトリック保守政党CEDA(スペイン独立右翼連合)からファランへ党へ合流した人物であり、ファランへ党からはむしろ異分子として受けとめられていたのである。<sup>(42)</sup> 二人を結ぶ友好関係は以後数十年にわたって持続することとなる。<sup>(43)</sup> スペイン内戦が終了する頃にベラスコは、セラノ・スニエールが新設した「政治学研究所」の報道官のポストを得ている。

ベラスコは、彼を諜報員として教育したドイツ国防省防諜部からコードネーム「ギジェルモ」、つまりドイツ語の「ヴィルヘルム」のスペイン語訳を与えられたが、それはまさしくカナリスの名前なのであった。カナリス提督は第一次大戦中に諜報員としてスペインで活動し、それ以来スペインとの密接な関係を維持していたのであつ

た。ベラスコも第二次世界大戦が勃発すると間もなくドイツのために活動した。

フランス敗北直後の一九四〇年七月、カナリスと敵対関係にあった親衛隊保安本部(SD)のシェーレンベルクが、マドリード駐在ドイツ大使およびスペイン内務省とともにある一つの計画を作成した。カナリスも当時スペインに滞在しており、この計画に絡んでいたと思われる。その計画とは、ウィンザー公(退位後のエドワード八世)夫妻をそそのかし、あわよくは公の手引きによりイギリスとの和平を締結しようというものであった。ウィンザー公はドイツおよびナチズムに好意的であると考えられていたからである。さらにまた、エドワードがイギリス国王に復帰できたという漠然とした期待も生じていた。当時リスボンに滞在していたウィンザー公にスペインへの越境をそそのかし、スペインでドイツの代表者が説得する手はずであった。そのためシェーレンベルクが直々にマドリードにやって来た。セラノ・スニエールのスペイン内務省が連絡役を引き受けることとなり、まもなくウィンザー公がこの計画への関心を示したらしいと伝えられた。セラノ・スニエールによりリスボンのウィンザー公の下に派遣された密使の一人がアンヘル・アルカサル・デ・ベラスコであった。彼は一通の手紙を携えてウィンザー公と会談し、スペインだけが安全だからという口実で公をスペインに誘ったのである。しかしウィンザー公は躊躇した。ドイツは誘拐という手段を使うことも考えたが、それはイギリスとの和平締結という目的にふさわしい方法とも思えなかった。<sup>(44)</sup>イギリス政府はウィンザー公が毅然とした態度をとれるのか心許なく、公の安全をも考慮して、公をバハマ諸島総督に任命した。これによりウィンザー公のイペリア半島滞在は突如として終わったのである。

一九四〇年の秋にベラスコはドイツ国防省防諜部のスパイとしてイギリスへ渡った。イギリス渡航を可能にしたのは、他でもないマドリード駐在イギリス大使サミュエル・ホーア卿であった。ホーアは、この煽動家ベラスコの過去、つまりフランコ一派との闘争をよく承知していた。しかしホーアは、ベラスコがこの間セラノの支持者と

なっていたことまでは知らなかったと思われる。フランコに反対する盟友を見いだし得たと考えたホーアは、ロンドン駐在スペイン大使館の報道アタッシェに就任するためイギリス外務省のアグレマンが欲しいというベラスコの要望を聞き入れた。<sup>(45)</sup>ベラスコ自身はのちに概略次のように主張している。「私はホーアに、私自身がロンドンへ行くと直接に申し出た。その目的として私はホーアに『枢軸側および連合国側のどちらにも偏らないで情報を収集するため、またフランコに敵対的なフアラン・ヘ党メンバーたちにイギリスの実際の戦闘意欲について情報を与えるため』と伝えた。このことはカナリスおよびフランコも了解済みのことだった。ホーア大使はセラノ・スニエール外相に、ロンドン駐在スペイン大使館内のポストを私に与えるよう要求した。さらにホーアは、イギリスの外交官専用のクーリエ便を利用することも提案した。<sup>(46)</sup>私は自分がイギリスを崇拜しており、イギリス・スペイン関係の改善に努力しているのだというふりをしてホーアを騙すことに成功した。私は政治家たちとマスコミに高く評価され、多くの面会の予定が入れられた<sup>(47)</sup>。ロンドンでベラスコは情報の糸を紡ぎ始めた。スペイン人のジャーナリスト、スコットランドやウエールズの分離主義者などが彼の下で働いた。諜報組織は爆撃による損害やイギリス軍の編制に関する報告をドイツに送った。<sup>(48)</sup>ベラスコに情報を提供していた者は、実はイギリス当局にも情報を漏らしていたのだが、それが初めからなのか、あるいは発覚後「寝返り」をしたのか、いずれにせよベラスコには知る由もなかった。また、ベラスコ自身も部分的に情報を自ら捏造させとしてドイツに渡していたらしい。イギリス情報部は、こうした情報の質が悪いことを承知していたので、ベラスコをそのまま泳がせておいた。ベラスコの活動はイギリスの利益を害するよりもむしろドイツに損害を与えるからであった。イギリスがようやく逮捕に踏み切ったのはベラスコの後継者、すなわちジャーナリストのルイス・カルボであった。この男は外交的保護を享受していなかったのである。一九四二年二月に発生したこのカルボ逮捕事件は、スペインに圧力をかける目的で連合国によりセンチシヨナルに取り上げられた。<sup>(49)</sup>カルボ自身はスペインに拘留されていた二人のイギリス人諜報員と交換で釈放

され、そのことでようやく死刑を免れることとなる。<sup>(50)</sup>

スペインはすでに一九四〇年、ドイツに提供するための情報を収集するよう自国の在外代表部に對し訓令していた。<sup>(51)</sup> 太平洋戦争勃発のちには、この訓令に日本のための情報収集任務が加えられた。<sup>(52)</sup> 他方、スペインの二重スパイ達はベラスコ・グループ以外にもいたが、彼らは、たとえば一九四二年の北アフリカ上陸作戦、一九四三年のシチリア上陸作戦、一九四四年のノルマンディー上陸作戦などを準備するに際し、枢軸側に攪乱情報を伝えたことにより、第二次世界大戦の全過程を通じて、結果的に連合国側に極めて大きなメリットをもたらした。<sup>(53)</sup> そのほかイペリア半島に関するすべての情報はソ連にも到達していた可能性がある。というのも、ソ連の諜報員であるキム・フィルビー（一九八八年にモスクワで死去）が一九四一年以来イギリス情報部のイペリア班を率いていたからである。<sup>(54)</sup>

ベラスコは、セラノの指示によりイギリスを離れ、しばらくして日本の情報活動に参加することとなった。セラノ外相が諜報活動に関与していたことは、東京の外務省外交史料館に保存されている須磨公使の電報からもはっきり明らかとなる。そのうえ日本の暗号を解読していたアメリカ側が、報告のほとんどを傍受していた。これがのちに諜報組織の終焉をもたらすこととなるが、この盗聴資料からもセラノの役割が証明される。<sup>(55)</sup>

一九七八年、すなわちフランコの死後にこの文書がアメリカ政府の手で解禁された時、スペインでは非常なセンセーションが巻き起こった。<sup>(56)</sup> セラノもベラスコも、ともにまだ生存していたのである。前外相セラノは諜報活動への関与を全面的に否定した。また、初めはセラノと諜報組織の間に関係があったと認めていたベラスコも、のちには——おそらく政治的な圧力をかけられて——セラノを擁護し、セラノには何らの関わりもないと主張した。<sup>(58)</sup> 逆にベラスコは、詳細をすべて承知していたのはフランコであると主張した。<sup>(59)</sup> この主張の当否に関しては、現存する文書からは何も判断出来ない。これに関するアメリカの文書はまだ解禁されていないのかもしれない。ベ



ラスコ自身は筆者への私信の中で、概略次のように述べている。「太平洋戦争勃発の数日後、アメリカ合衆国における日本側の諜報網建設には私が適任だとカナリスがフランコに提案してきた。そのためフランコがセラノー・スニエールを通じて私をイギリスから召喚した。セラノー・スニエール外相はフランコの命令の伝達者として行動したし、もともと彼はフランコの伝声管に過ぎなかった。セラノー・スニエールはそもそもフランコの承認や指示なしには何も出来なかった。セラノーはなぜ日本が万一のことを考えてアメリカ合衆国に予め諜報組織を建設しておかなかったのかと訝っていた。須磨公使はこのフランコの提案を知らされていなかった。というのも須磨は常にセラノー・スニエールとだけ連絡を取っていたからである」<sup>(60)</sup>。

一九四一年一二月以来、須磨公使はイギリスおよびアメリカ合衆国からの情報を付した報告を日本に送った。須磨はこれらの情報を「セラノー情報」と名付け、通し番号を付していた。<sup>(61)</sup> それらの情報は本来の諜報資料ではなく、アメリカ合衆国やイギリスやアルゼンチンやブラジルに駐在するスペイン大使館がスペイン外務大臣に宛てて送った外交報告書からの情報であり、それらの情報はセラノー・スニエール外相の明示的な承認の下にスペイン駐在日本公使館に渡されていたのであった。<sup>(62)</sup> このころ須磨は次のような見解に達している。「スペインは日本に対し、ドイツやイタリアに対する以上に好意を示している」<sup>(63)</sup>。

諜報組織の名称としては当時、日本語で「東」を意味する「*Sur*」という言葉が用いられた。<sup>(64)</sup> 一九四一年三月にスペイン駐在公使に任命された須磨弥吉郎は、かつて外務省情報部長として諜報資料収集に携わった経験があり、このため、諜報分野において多くを期待し得るスペインという任地にはうってつけの人間であった。諜報活動は、明らかに須磨のスペインでの活動の大部分を構成するものであった。須磨がマドリードに赴任する途中、松岡外相はロサンゼルス駐在日本領事館に次のような電報を打っている。「須磨公使が赴任途中に新田丸で一月一日サンフランシスコに到着する予定である。サンフランシスコに向いて、諜報活動と宣伝活動につき相談されたい」<sup>(65)</sup>。

須磨と同様イギリスとアメリカ合衆国からスペインに派遣されていた大使、つまりホーアとヘイズも、かつて諜報活動に関わっていた人物であった。諜報組織との実際上の連絡業務は、一等書記官の三浦文夫が担当した。<sup>(66)</sup> 一等書記官が諜報活動の責任者であったのは他の在外日本代表部でも同様である。

ベラスコ自身はのちに次のように回想している。「一九四一年末、私はロンドンでただちにスペインに戻るよう電報による訓令を受け取り、一九四一年二月二日頃スペインに帰国した。スペインで須磨と三浦が私に、アメリカ合衆国でスパイ組織を建設するよう要請し、私は承諾した」。二月二日、彼らはレストラン『ラ・バラツカ』で一緒に食事をした。レストランの来客名簿に彼らの署名が残っているのでこの日付は間違いないと確認できる。<sup>(67)</sup> 一九四二年一月四日、須磨は、一月二日に行われたベラスコとの会談を報告した電報を送っている。その電報

の内容は、ベラスコの名前を含め、文書の機密解除の前にアメリカ政府当局により部分的に抹消されていた。しかしその諜報はロンドン駐在スペイン大使館報道官(すなわちベラスコ)であり、一月七日にイギリスに戻るとい内容の一節が残されている。<sup>(68)</sup> その他にも須磨は、翌日の電報でもベラスコとの会見について触れている。その文書でもベラスコの名前は抹消されているが、脚注に記してある名前はうっかり消し忘れてあり、彼の名前を確認することが出来る。<sup>(69)</sup> 一月四日の電報で須磨は、一月二日のベラスコとの会談について概略次のように報告している。

「ベラスコはイギリスに二人の諜報員からなる情報網を維持しており、先刻フランコとセラノ・スニエールにイギリス国内情勢に関する詳細な報告を提出したところである。その電報は私(須磨)にも提供された。<sup>(70)</sup> 須磨は同日、この報告の全文を多くの電報に分けて日本に送った。

一月七日、須磨はセラノ・スニエール外相と会談し、そこでも一月二日のベラスコの訪問について取り上げた。セラノ・スニエールはその時次のように主張した。

「実を言うと、貴方を訪問するようベラスコに命じたのは私だ。ロンドン駐在スペイン大使以外には誰も知らな

いことだが、我々は諜報網を組織する特殊任務のためベラスコを派遣したのだ。彼がもたらす情報は信頼できるが、危険を伴う。すでにベラスコの諜報網はぜんまい仕掛けの時計のように正確に機能しており、信頼できる情報をもたらずが、いま彼をイギリスに送り返すのは危険すぎると思う。我々は、しばらく彼を元の職務に復帰させないと決定した」。須磨は、スペインがアメリカ合衆国でも同様の工作を実施しているのか尋ねた。セラノは答えた。「我が国は合衆国に三人の諜報員を派遣しているが、かつて彼らから重要な情報もたらされたことはない。アメリカ駐在スペイン大使館からも価値ある情報はあまり来ていない」。それゆえ、須磨は次のように提案した。「それなら今、アルカサルを派遣したらどうかね？」セラノは答えた。「我々はそれを現在検討中だが、しばらくはベラスコ自身にその問題を任せようと思う。それから、将来イギリス駐在スペイン大使館およびアメリカ駐在スペイン大使館からもたらされる情報の詳細をあなたに渡そうと思っている」。

一九四二年一月八日に須磨は、イギリスによる戦車の海上輸送についてベラスコから得た情報を初めての「東」報告として打電した。<sup>(73)</sup>翌九日、ベラスコが須磨を訪問し、具体的な取り決めを行った。ベラスコは須磨に、日本のために諜報活動をするようセラノ・スニエールから指示されたと伝えた。これを聞いた須磨がその場でセラノに電話をかけて確認したところ、セラノはその通りだと答えた。ベラスコは諜報活動に関するいくつかの計画を須磨に提示し、もし日本がこうした提案に同意するならばだちに活動を開始したいと述べた。ただ、ベラスコによれば、セラノ・スニエール外相がベラスコ自身をアメリカに派遣することに安全面から躊躇しており、そのためベラスコは、自分の代わりに絶対に信用できる人間を派遣したいと述べた。予算面ではベラスコは、日本が諜報用機器の費用および旅費を負担するよう依頼し、一方、その他のすべての経費はスペインが負担すると述べた。しかし須磨は日本外務省に、もっと多くの経費を負担するよう進言した。スペインの好意に甘えたりするのではなく、諜報員に良質の情報を獲得しようという意欲をおこさせるためであった。<sup>(74)</sup>

しかし、諜報組織創設当初より以後数年にわたり、須磨はかなりの軽率さを示した。日本宛の電報の中で須磨は情報資料の内容を伝え、外相セラノの関与についての証拠をもたらしただのみならず、ベラスコを含む一連の諜報の名前、彼らの出張経路および日付、あるいは隠蔽工作をも列挙していたのである。したがって、アメリカの秘密情報機関にとっては、諜報員を暴くことは困難ではなかった。しかしながら、解禁された史料では、存命中の人物などの名前や事実の詳細は、大抵の場合故意に伏せられている。ただ、わずかに残された日本の原史料ではそれを確認する事が出来る。<sup>(75)</sup>

ベラスコによれば、日本のために集めたすべての情報をスペイン秘密情報部とドイツ国防省防諜部、とくにそのスペイン駐在代表ヴィリー・オーバービルに提供していたという。現在ドイツにはこのことを証明する史料が存在していないが、ベラスコによれば、それはカナリスが反ヒトラー抵抗運動に参加したという嫌疑をかけられた時、カナリスと防諜部員により可能な限りの文書が破棄されてしまったからだという。残りの文書は保安本部長シェーレンベルクによりドイツ降伏の前に焼却処分されたという。ベラスコはカナリスと防諜部の信頼性に疑問を感じていたと主張し、戦争後数十年たった時点でもカナリスの反ヒトラー抵抗活動を批判した。ベラスコによれば、スペインでは、唯一の秘密情報機関が軍の機関としてかつて存在していた。この機関はカナリスの側からの大規模な援助により建設され、フランコに直属していたという。しかしそれに関する文書はすべてフランコの死の一年前、一九七四年に処分されてしまったという。<sup>(76)</sup>

「東」情報の引き渡しについては、一九四二年七月二二日の須磨発外務省宛電報の中に多く言及されている。「東」情報は、到着後、まずベラスコ、スペイン駐在ドイツ大使館付ドイツ国防省防諜部代表、外相セラノ・スニエールに直接渡される。もしセラノ・スニエール外相が仕事で多忙なときは、ベラスコ、防諜部代表、須磨のあとにセラノ・スニエールが情報を得ることもあった。須磨公使はこの時、ベラスコの人物とその過去および現

在の諜報活動、さらにベラスコのセラノ・スニエールとの緊密な関係について、今までで最も詳細な報告を打電している。<sup>(77)</sup> アメリカの盗聴機関はこれも解読していた。

ベラスコとの会談の直後、須磨は、外務省に次のように報告を行った。外交官の資格を与えられた諜報員が、アメリカへ二人、ダカールへ一人、オーストラリアへ一人派遣される。彼らは短波送信機および特殊インクを所持している。マドリードにおける送信および受信はベラスコ自身が担当する。セラノは出国する諜報員が外交官の地位を得られるよう手配する。<sup>(78)</sup> ベラスコ自身ののちの供述によれば、ベラスコも自ら諜報網の組織化のためグアテマラのパスポートを与えられてメキシコ経由でアメリカ合衆国へ渡った。<sup>(79)</sup>

早くも一九四二年一月一六日の電報で須磨は、ベラスコとしばしば会談をもったと伝えている。須磨によれば、ベラスコは、イギリスにおける諜報網について次のように語ったという。「この諜報網はセラノ・スニエール外相とドイツ政府との合意に基づき、ドイツのために活動する特務機関である。けれども、ドイツは厳格な秘密保持の観点から、この諜報網から得た情報を絶対に第三者に譲渡しなかった。しかしスニエール外相からの指示に従って、今回の件についてはドイツには通知されていない。日本政府がこの機関を利用することについてはなんら障害はないと思われる。そのうえ、この機関のために資金を拠出する必要もないと思われる」。そのあとベラスコはドイツによる経費負担および装備提供の規模について、さらには特殊インクによる情報伝達の態様について、さまざまな供述を行った。須磨は日本外務省に、日本側からどの程度資金提供が可能かただちに伝えるよう要求した。諜報員一人当たりの経費として須磨は三万ドルを見込んだ。<sup>(80)</sup> 加えて須磨は、イギリスにおける諜報網の経費としてスペインに財政的支援を拠出するよう提案した。<sup>(81)</sup>

一月末、日本外務省は須磨に、以下の各項目に関する情報資料が緊急に必要であると打電した。一、ハワイで損害を受けた軍艦の修理の進捗状況、二、潜水艦建造の統計資料、三、大西洋から太平洋への艦船の動き、四、航空

機の移動状況、五、アメリカ軍の編制、六、太平洋岸からの軍隊・軍事物資の派遣に関する状況および派遣先、七、以前南太平洋から供給されていた戦略物資（ゴム、錫、クロム、マンガンなど）を確保するに際しアメリカ合衆国が直面している諸困難、八、混合船団の形での敵国籍の船の移動、およびアメリカによるイギリス・ソ連向けの海上輸送、九、アメリカによるイギリス・ソ連・中国への援助、十、アメリカの政治的・経済的な矛盾と難題、ローズヴェルト政権の弱体化、さらにはその打倒の可能性、十一、対ラテンアメリカ政策、十二、人種問題および国内対立の可能性、十三、インフレと社会問題、十四、オーストラリアとの関係、十五、日本を対象とする情報組織、地上軍と空軍、十六、教育と民生、十七、英豪関係、十八、スペインとアフリカにおける米英の攻撃能力<sup>(82)</sup>。

須磨は四月半ばにこのリストのスペイン語訳を外相セラノ・スニエールに示し、それに関する情報を米英駐在スペイン外交官に集めさせて欲しいと要請した。しかしこの間アメリカは、当然のことながらスペイン、とりわけセラノ・スニエール率いるスペイン外務省に対して非常に警戒的な態度をとっていた。日本の暗号が破られ、須磨の電報がアメリカ政府によって解読されていることに、スペイン政府はまだ気づいてはいなかった。けれどもロンドンにおけるベラスコの後継者ルイス・カルボが逮捕されたことにより、連合国側はスペイン人の入国を制限する絶好の口実を得た。<sup>(83)</sup> 須磨がスペインの米英駐在大使館を通じて協力をスペイン外務省に要請したとき、外相セラノ・スニエールはこの事実を須磨に通知した。ルイス・カルボの逮捕にもかかわらず須磨は、将来もベラスコを通じてイギリスにおける諜報機関の情報を手に入れることが出来るだろうと期待していた。<sup>(84)</sup> 実際須磨は、その後も数ヶ月にわたって電報で情報を送達し、それらの情報はロンドンの諜報機関から集めたものであると述べていた。

東郷茂徳外務大臣は須磨の情報網に大きな期待を持っていたようである。たとえば一九四二年六月一〇日に東郷は、アメリカ訪問中のソ連外相モロトフがローズヴェルト大統領およびハル國務長官との間で交わしたといわれる会談の内容を探り出すよう須磨に指令している。<sup>(85)</sup> しかし須磨はさしあたり、合衆国訪問の途上でモロトフがチャイ

チルおよびイギリス政府高官と交わしたとされる会談の内容を報告し得たにすぎなかつた。<sup>(86)</sup> 数日後須磨は、チャーチルおよびローズヴェルトとモロトフの会談内容に関わるワシントンからの「東」情報を追加送達したが、その内容はまったく月並みなものであつた。<sup>(87)</sup> しかしこの電報は初めてアメリカから送られた「東」情報であり、しかもおそらく初めてアメリカ合衆国に傍受されたワシントンからの「東」情報であるという点で注目し得る。この電報だけでなく、他の様々な電報でも須磨は、外国の政治家および外交官達の会談内容ないし電報内容と称するものをスペイン側から得られたものとして電送している。その内容が正しいか否かは確認するのが困難であるが、しかし多くの場合まったく重要性に欠ける内容であつた。諜報員自身が内容を捏造することもあり得たであろう。とりわけスペイン駐在イギリス大使サミュエル・ホーアと外相イーデンの間での電報などは、こうした捏造の部類に属するものであつた。<sup>(88)</sup>

一九四二年七月頃にアメリカでの諜報組織の活動準備が完了し、一二名のスペイン人が派遣された。その数ほのちに二〇名以上に増加することとなる。彼らは主としてアメリカ西海岸の大都市、港湾、海軍基地、飛行機工場をはじめとする軍需産業に活動を集中した。それ以外にニューヨーク、ワシントン、ニューオーリンズにも若干の諜報員が存在した。日本側は民衆の士気や建造中の軍艦の数、輸送船団および艦隊の移動、太平洋の様々な戦場に関する情報を要求した。情報は通常メキシコに送られ、そこから短波でカリブ海のスペイン船に伝達され、さらに無線でマドリッドへ転送された。ベラスコはそれらの情報を特殊インクで書き記し、一部を須磨に渡し、須磨はそれをドイツ駐在日本大使館に送つた。ドイツ駐在日本大使館は、それらをさらに電報で東京に転送した。<sup>(89)</sup> また、こうした報告は、スペインのドイツ国防省防諜部代表と外相セラノにも渡された。諜報組織は、ワシントン駐在スペイン大使館とニューヨーク駐在スペイン総領事館の電信施設をも部分的に利用した。<sup>(90)</sup> スペインのクリー工便も利用された。それぞれの報告は、アルゼンチン人ファン・ペロンにより組織され枢軸諸国のために活動していたサンチ

アゴ・デ・チリの諜報センターに転送された。<sup>(91)</sup>

日本は、ドイツの出資によるイギリスでの諜報網を無料で利用したが、アメリカの諜報組織のための財政は単独で負担しなければならなかった。一九四二年八月、須磨は日本外務省にその事実をふたたび持ち出し、日本政府はイギリスで活動する諜報員に、せめてケース・バイ・ケースで報奨金を支給するよう付言した。この電報のきつかけを与えたのはベラスコのある報告であり、それによれば、イギリスでの諜報組織と同様にアメリカ合衆国での諜報組織を完成させるには、少なくとも二〇人の諜報員をアメリカに密入国させる必要があるというのであった。こうしていまや必要経費はかなりの額となった。須磨は外務省に、いままで三万ドルを受領したが、そのうち残金はわずかであるので、さらに四〇万ドルを、出来ればスイス・フランで、さもなければドイツ・マルクで送金するよう要求した。<sup>(92)</sup> 数年のあいだに約五〇万ドルが支出されたようであるが、<sup>(93)</sup> ベラスコによれば日本政府が支出した額はもつとずっと多かったという。<sup>(94)</sup> 資金が足りず、そのため日本は兌換可能な外国為替の不足につねに悩まされていた。一九四二年一二月、須磨はアメリカ合衆国における諜報活動の資金として百万円(約二五万ドル)というかなりの額を外務省に要求した。須磨によれば、アメリカ駐在の新任スペイン陸軍武官に持つていかせるとのことであった。<sup>(95)</sup> 日本外務省は、最初にまず残っていた資金を利用しようとした。太平洋戦争が勃発したとき、マサチューセッツ街の日本大使館の金庫には五〇万ドルの現金が残されていた。交換協定に基づき日本人は多額の現金を持ち帰ることを禁止されていたが、現金を残してきた主たる理由は、もはやいかなる金をもアメリカに返送することは不可能であろうと日本側が見越していたことであつた。彼らは、スペイン政府が日本の利益を代表する際に使つてもらうため、現金を残しておこうと考えたのである。したがって日本外務省は、必要な場合、アメリカ駐在スペイン大使にこの金を取りに行つてもらつてもらうつもりであつた。日本外務省は須磨への電報で、金庫を開けるための暗証番号を伝達した。<sup>(96)</sup> しかしスペイン外務省の高官は須磨に、その方法には「若干の不都合な側面」があり、そのうえス



イン政府の通常のクーリエ便は安全ではないので、だれか外交官がアメリカに派遣されるまで待つてほしいと述べた。以後数ヶ月の間、カルデナス大使本人を初めとしてスペインの外交官達は何回も本国とアメリカの間を往復したが、彼らによれば日本の要求を伝達するための方法は何もないというのであった。<sup>(97)</sup>

そのため日本外務省は、別の送金方法を見つけないならなかつた。日本外務省は、須磨に要求された額の半分、すなわち五〇万円しか調達出来ず、それを一九四三年一月に電報で振替送金した。けれども日本の敵国にいささかの不審をも与えないために、資金はベルン（スイス）駐在の日本公使宛に振り込まれることとなり、須磨はベルン駐在公使と連絡を取つて資金の転送を手配することとなつた。<sup>(98)</sup>そして日本外務省は、日本軍部に残りの半分の資金を調達するよう要求した。その際陸軍と海軍が同額ずつ、つまりそれぞれが二五万円ずつを調達することとされた。海軍はただちに同意したが、陸軍は難色を示した。<sup>(99)</sup>

その後の経過については現存資料では分からない。しかもこの問題は、アメリカ駐在新任スペイン陸軍武官に予定されていたカステホン將軍に対しアメリカ合衆国が入国を拒否したことによつていつそう複雑となつた。須磨と谷外務大臣の電報のやりとりを解読したアメリカには、まさしくこのカステホン將軍が「東」機関諜報員の指導者になると思われたようである。<sup>(100)</sup>

この資金に対処するため、日本政府はスペインのクーリエ便を通じて高価な真珠を須磨に送つた。それを売却して外国に通用する支払い手段を獲得するためである。しかしながら、様々な交換船で世界をさまよつたあと、須磨公使の手に届いた鞆の中は空であつた。ずっとあとに、アメリカの役人が辛辣なコメントをつけて真珠をワシントン駐在スペイン大使に返却した。<sup>(101)</sup>日本外務省はスペイン政府に、鞆の中には業務用の書簡だけが入つていたと言ひ訳をしたが、真珠の価値は一〇万円にもほると言われている。<sup>(102)</sup>この事件のあと、須磨がすぐ「こういうことは危険である。暗号文書も解読されている可能性がある」と注意を喚起したにもかかわらず、日本の外務省は暗号が解

読されている可能性があるとは考えなかつた。<sup>(10)</sup>したがって須磨は困難な国際状況を考慮し、スペインを介在させた形で物資の送付をこれ以上行わないよう求めた。<sup>(16)</sup>このため、次の小包はドイツの封鎖突破船ラコティス号を用いて送られた。しかしこの封鎖突破船は一九四三年元旦にポルドー沖四〇海里で捕捉され、イギリス軽巡洋艦シーラ号の艦砲射撃により撃沈されてしまったのである。乗組員は救命ボートによりスペイン北西端の町ラコルーニャにたどり着くことが出来た。<sup>(16)</sup>日本政府はラコティス号の運命についてしばらく何も知らなかつた。撃沈からおよそ一週間後、心配になつた日本外務省は、ラコティス号がドイツの支配地域内に到着したかどうかベルリン駐在日本大使館に問い合わせた。<sup>(17)</sup>真珠売却による資金調達という考えはまだ放棄されていなかつたのである。駐独大島大使は駐フランス大使館を通じて真珠を売却出来ると考え、新任イタリア駐在大使の日高信六郎がシベリア横断鉄道を使つて赴任するときに鞆に大量の真珠を携行しよう提案した。<sup>(18)</sup>

スペイン政府との良好な関係により、北アフリカ、とりわけスペイン領モロッコとタンジールにおける日本の諜報活動が可能となつた。太平洋戦争が勃発してから二週間後、スペイン駐在公使館から人員を派遣してジブラルタル、タンジール、カナリア諸島に視察旅行をさせるよう須磨に訓令が届いた。こうした地点が敵国の活動を偵察するのにふさわしいかどうかの可能性を探るためで、日本人ないしスペイン人が投入されることになつては、もちろんイギリス領ジブラルタルでの諜報活動はスペイン人のみがなしうることであつた。もし視察旅行の許可が下りない場合は、スペイン駐在公使館は、ドイツ秘密諜報機関から情報を収集し、さらにドイツ秘密情報機関の援助により別個の諜報機関を組織すべく尽力することになつていた。<sup>(19)</sup>一九四二年一月三十一日に須磨は、タンジール及びスペイン領北アフリカへの視察旅行から戻つてきた「つちや」姓の日本人の報告を電報で東京に送つた。その報告によれば、タンジールとセウタからはジブラルタルの出入港や、地中海への船の往来がよく観察出来るとされた。その上この報告では、モロッコおよびカナリア諸島におけるスペイン軍の現勢についての統計資料が提供され

ていた。<sup>(10)</sup>ベルリン駐在の大島日本大使は、一九四一年二月から一九四二年一月までの期間に行われた三人ないし三グループによるフランス領モロッコ、アルジェリア、タンジールへの視察旅行に関する経費計算書を東京へ送付している。<sup>(11)</sup>東郷茂徳外務大臣は一九四二年八月、タンジールに日本総領事館を開設したいのでスペイン政府の了解を得るよう須磨に指示した。<sup>(12)</sup>数日後、須磨自身が数日間にわたってモロッコへ旅行した。<sup>(13)</sup>

喜望峰沖を通過する敵国の動向も日本にとっては非常に重要であると須磨は確信していたが、そこには須磨の諜報員は駐在していなかった。そこで須磨は一九四二年七月、日米居留民の交換のためモザンビークのロレンソ・マルケスに交換船が入港する予定であったのを利用し、そこに暫定的に領事館を開設しよう提案した。有能な青年将校がここを基地として活動すれば、情報活動がうまく行くというのであった。<sup>(14)</sup>日本の将校は、すでに北アフリカに常駐し、ジブラルタル海峡を通過する船団の往来や、のちには連合国の軍の移動を観察していた。<sup>(15)</sup>しかし、タンジールに領事館を設立したいという日本政府の要求は、英米から圧力がかかったため、実現されなかった。<sup>(16)</sup>そのかわり日本は、欧州戦争勃発後に閉鎖していたフランス領モロッコのカサブランカ総領事館を再開した。

一方アメリカは、一九四二年六月から入手し始めた諜報資料の内容が正確かどうかを精査していた。そして、それらが、たしかに不正確ではあるが、しかし核心ではしばしば真実を含んでいることを認識していた。<sup>(17)</sup>そのうえ、ベラスコの諜報組織は、時の経過とともに、活動を改善していた。アメリカ当局は、艦船の移動や軍隊および物資の輸送に関する彼らの報告がほぼ正確であるとの結論に達していた。<sup>(18)</sup>

スペインの諜報組織は、戦略的な重要性をもつ確かな情報を収集することに成功していた。一九四二年五月に日本に占領されていたソロモン諸島に関する情報が続々と入ってきた。アメリカ合衆国は八月にガダルカナル上陸作戦を敢行し、困難な戦闘に引き込まれていた。須磨は、合衆国がソロモン諸島およびアリューシャン列島の情勢を悲観的に判断している旨を報告した。しかし須磨によれば、合衆国は、日本軍を駆逐するためにはいかなる犠牲を

も払う決意であり、もしアメリカ軍がなお一か月耐えられれば、アメリカ軍は相当強化されるとの見通しであると考えられた。<sup>(16)</sup>

火炎放射器などで武装した一万二千人の落下傘部隊の派遣など、オーストラリア・ニュージージーランド地域へのアメリカ軍部隊の増派に関する「東」機関の情報もまた、ソロモン諸島作戦との関連で考える必要がある。しかしこれらの報告は東京では深刻には受け止められず、陸軍と海軍の重要部局には到達しなかった。外務省および陸海両軍の間での、ただでさえ厄介な管轄領域の混乱と相互の敵対関係が、こうした事情に拍車をかけた。日本はわずかの増派を行ったにすぎず、激しい抵抗にもかかわらず翌年二月にこの島を放棄せざるを得なかった。<sup>(17)</sup> ガダルカナルは太平洋戦争での重要な転換点の一つとなり、須磨は、ガダルタナルでの壊滅的な敗北ののち、スペイン人の日本に対する称賛が揺らいだことを確認せざるを得なかった。<sup>(18)</sup>

一九四二年八月以降に届いた情報は東京で比較的多くの注目を集めた。合衆国は、二ヶ月前に日本軍に占領されたアリューシャン列島のキスカ島とアッツ島を再占領するため、増強部隊の派遣を準備していた。<sup>(19)</sup> スペイン陸軍参謀本部は一九四二年末、アメリカ本土からアラスカまで延びる道路の建設が完了したこと、さらにその道路の状態や運送に使用され始めたことを日本側に情報として伝えた。<sup>(20)</sup> 外務省がこの北部太平洋領域へのアメリカ軍の移動と物資の輸送に大きな関心を示したため、須磨は諜報員一人をカナダのバンクーバーに派遣することが出来た。<sup>(21)</sup> スペインはこの諜報活動計画のためにわざわざ代表部を開設し、この諜報員の肩書で出張した。しかしこの諜報員フェルナンド・デ・コッペ・チンチーリヤは嚴重な監視下に置かれていた。須磨はもともとこのポストに別の人間を起用する予定であったが、セラノが解任されたためその計画は頓挫してしまった。コッペはスペインからバンクーバー駐在領事に任命されたが、須磨はコッペを英米へのシンパシーを持つものと疑っており、そのためコッペの任命の裏には日本側の活動を終わらせようとするスペイン政府の意図があると考えた。ベラスコもコッペに反

対する意見を表明していた。そのため須磨はバンクーバーで諜報活動を行うという考えを断念したのである。しかし須磨は、三浦とともにコッベと直接面会した時の印象が良かったためもう一度考えを改めた。コッベは日本のために進んで諜報活動に従事することを承諾し、最後にはベラスコも賛成した。<sup>(12)</sup>これを伝える須磨の電報は一日でアメリカ側に解読された。このためアメリカは、コッベのバンクーバー到着の約二ヶ月も前からコッベの真の任務を承知していたのである。一九四三年三月三日、須磨はコッベからの最初の電報を受け取った。その電報はアリュエーシャン列島への武器および部隊の輸送に関するものであった。加えてこのコッベの電報は、予定された偵察活動にある一人の諜報員を投入することが可能だとの報告をも含んでいた。<sup>(13)</sup>しかし、またもや須磨が不用意にもその諜報員の正確な名前を挙げてしまったのに加えて、アメリカ側は、ベラスコが徴用していたこのアラドレンという名のスペイン人に関する決定的な情報を得ていた。実はアラドレンは自発的にアメリカ合衆国に二重スパイとして活動すると申し出ていたのであった。バンクーバー領事コッベは事実を認め、しかも、国外退去を命じられる前の尋問で、知っている限りの事実を詳細に明かしてしまつた。連合国側は、スペインに政治的圧力を行使するため、この事件を十分に活用した。<sup>(14)</sup>

日本はもう一人の別の諜報員からも重要な情報を得ていたが、アメリカはこの諜報員の活動により、諜報組織に打撃を与えるチャンスをつたたび獲得した。一九四二年の年末に須磨は、爆発すると広範な地域に摂氏千度の高熱を放射する能力を持つ爆弾をアメリカ合衆国が開発した、との報告を伝送した。<sup>(15)</sup>須磨もベラスコもこの情報に相応の注意を払わなかつたようであるが、日本政府はこの情報に注目した。東京では、合衆国が原子力研究および核兵器開発の分野で決定的な進歩を遂げたと受け取められた。翌年一月に東条首相は、アメリカに対抗して原子爆弾を開発するよう科学者集団に要請した。<sup>(16)</sup>

ベラスコは、アメリカでさらに詳細な事実を探りだすため努力するよう命令された。ベラスコはこのため、彼の

有能な諜報員の一人であるロゲリオという二四歳のガリシア地方出身の青年を投入した。しかしこの男の報告は一九四三年四月以降途絶えてしまった。ペラスコがのちに調査したところによれば、この諜報員はラスベガスで射殺されてしまったという。ペラスコは、アメリカの諜報機関が自分の活動を追跡している可能性があるとして初めて疑った。同時に自分の命も危ないと思いはじめた。<sup>(13)</sup>

(1) ブルゴス発電報 一九三七年七月二八日および三〇日、外務省外交史料館「諸外国内政関係雑纂 西国の部 内乱関係(新政府承認を含む)」第一巻(全四巻、以下「外務省 内乱関係」と略)。スペイン内戦関係ではそのほか以下の文書綴が重要である。「諸外国内政関係雑纂 西国の部 内乱関係 各国の態度(不干渉協定を含む)」全四巻。以下「外務省 各国の態度」と略。

本稿で考察対象となる時期の日西関係を扱った研究は現在までのところ存在しない。部分的に重要な小論文ないし研究として以下のものがある。塩崎弘明「フランコ政権の日独伊防共協定参加について——スペイン内戦と日本軍部との関係についての若干の史料」、斉藤孝(編)『スペイン内戦の研究』(中央公論社、一九七九年)二五八—二七四頁。川成洋『スペインへの道』(れんが書房新社、一九八三年)。同「日本人とスペイン戦争」、三輪公忠(編)『日本の一九三〇年代』(彩流社、一九八〇年)三〇五—三三三頁。同「第二次大戦期の日西関係」、五味俊樹/長谷川雄一(編)『日本外交と対外紛争』(れんが書房新社、一九八四年)二八—二九四頁。同「スペイン内戦期から太平洋戦争期における日西外交関係」、『人文科学年報』(専修大学)第一四号(一九八四年三月)一一—三三頁。同「スペイン 未完の現代史」(彩流社、一九八五年)。同(編)『史料 三〇年代の新聞報道——スペイン戦争の受容と反応』(彩流社、一九八二年)。坂井米夫『動乱のスペイン報告』(川成洋編、彩流社、一九八〇年。著者は内戦中、スペインにおける朝日新聞の通信員)。田嶋信雄『スペイン内戦とドイツの軍事介入』、スペイン史学会編『スペイン内戦と国際政治』(彩流社、一九九〇年)一一三—一四九頁。Vicente R. Pflapl, "The Far East", in: James Corrada (ed.), *Spain in the Twentieth Century World. Essay on Spanish Diplomacy, 1898-1978*, Westport/Conn, 1980, pp.213-234. Florentino Roddo, "España y la guerra del Pacifico", in: *El País*, 8.12.1991, pp.14-15; 逢坂剛「スペイン内戦余聞」、『法政大学スペイン現代史研究会』『スペイン現代史』一九八三年一〇月、五一—五八頁。同「イベリアの諜報戦」、『スペイン現代史』一九八四年二月、七五—八四頁。

- 同「スペイン内戦と日本外交」『スペイン現代史』一九八八年五月、四三—四八頁。逢坂剛・林家水吉（対談）「昭和二〇年 スペインの熱い日々」、『中央公論』一九九二年九月、二五六—二六四頁。波多野澄雄「情報外交——須磨弥吉郎」、『外交フォーラム』一九八八年一〇月、五五一—六〇頁。秦郁彦「昭和史の謎を追う 失われた対米諜報——」、『東情報の密使ベラスコ』、『正論』一九九〇年二月、二五〇—二六三頁。深澤安博「スペイン内戦と日中戦争——日西外務省文書を中心に」、『歴史評論』第四四七号（一九八七年）、四一—五三頁。鈴崎和朗「スペイン内戦と日本外交」、『史泉』七二号、一九九〇年九月、六四—七四頁。
- (2) スペイン公使サンチャゴ・メンデス・デ・ビゴの一九三六年八月二六日付有田外相宛報告、外務省、内乱関係、第一巻。同日の同盟通信報道、同上。日本の警察の認識によれば、公使は大土地所有者として共和国政府に財産を没収され、このため政府に反感を抱いていた（一九三六年八月五日付東京警視総監発外務省、内務省および関係各省宛、同上）。
- (3) 一九三六年九月四日付外務省人事課の調査、同上。デ・ビゴは九月一日に日本を離れた。公使館参事官ファン・G・デ・モリナは東京に留まった。外務省はマドリッドとの交渉が必要な場合、スペイン駐在日本公使館のみを通じて行うことに決めたが、「部局長」としてのデ・モリナとの接触は必ずしも排除しなかった（同上）。
- (4) 川成洋「スペイン戦争と日中戦争——フランコ政権承認をめぐる日本の軍部外交」、『法政大学教養部紀要』第四七号（一九八三年）一五〇頁（この論文は川成洋『スペインへの道』七九—九三頁に再録されている）。
- (5) 矢野の電報を参照、外務省「内乱関係」第一巻および「各国の態度」第一巻。日本がフランコ政権を承認した一九三七年二月から、日本での長期休暇を終えた矢野が公使としての業務を再開する一九三八年一月までの間、高岡がサラマンカのフランコ政権の下で代理公使を務めた。
- (6) 参照、Gerhard Krebs, *Japans Deutschlandpolitik 1935-1941*, 2. Bd., Hamburg, 1984, Kap. I.
- (7) たとえば一九三六年一月一三日の枢密院における次のような有田外相の発言を参照せよ。「コミンテルンの活動は最近特にスペインの人民戦線の運動で活発化している。内戦の実状から判断すれば、ソ連とコミンテルンが他国の内政に介入して共産主義的活動をおこない、内政的不安を引き起こし、国際平和を脅かしていることが証明できる」、極東軍事裁判文書、検察側文書一一〇五号（未刊行文書。引用は東京大学社会科学研究所が所蔵するテキストによる）。
- (8) 塩崎前掲論文二六三頁。
- (9) Hans-Henning Abendroth, *Hitler in der spanischen Arena*, Paderborn 1973, S.230.

- (10) 一九三六年二月にドイツの仲介でフランコ軍に派遣された西浦進陸軍大尉の詳細な報告を見よ。外務省「内乱関係」第一巻(一九三七年一月六日付)。さらに、西浦の情報に基づいたバリ駐在日本陸軍武官孤田康一大佐の研究をも参照、同上。そのほか、西浦進「昭和戦争史の証言」(原書房、一九八〇年)六四一―六六頁。塩崎前掲論文二六三・二六八頁。
- (11) スペインの加入に関連する諸事件については、参照、Abendroth, aa.O., S.230-234。塩崎前掲論文二七〇頁。フランコ・ヒトラー時代の独西関係については、そのほかにも、参照、Charles B. Burdick, *Germany's Military Strategy and Spain in World War II*, Syracuse 1968; Donald S. Detwiler, *Hitler, Franco and Gibraltar*, Wiesbaden 1962; Ramon Garriga, *Las relaciones secretas entre Franco y Hitler*, Buenos Aires 1965; Mathias Ruiz Holst, *Neutralität oder Kriegsteiligung? Die deutsch-spanischen Verhandlungen im Jahre 1940*, Pfaffenweiler 1986; Klaus-Jörg Ruhl, *Spanien im Zweiten Weltkrieg. Franco, die Falange und das "Dritte Reich"*, Hamburg 1975。スペインの中立の問題については、次の新著を参照、Denis Smyth, *Diplomacy and Strategy of Survival. British Policy and Franco's Spain, 1940-1941*, Cambridge 1986。
- (12) Plessen (Rom) 24.2.1939, *Akten zur Deutschen Auswärtigen Politik* (以下: ADAP), Bd. D III, Baden Baden 1951, Nr.744。西欧諸国に対する軍事同盟にスペインを編入する計画については、参照、元イタリア外相チアーノのメモ、Galeazzo Ciano, *Tagebücher 1939-1943*, Bern 1946, S.42-43。
- (13) Holst, aa.O., S.42。
- (14) Detwiler, aa.O., S.16。一九三九年二月二六日付チアーノ宛ガンズラ(ペドリード)電報、I Documenti Diplomatici Italiani (以下: DDI) IX, 2, Rom 1957, Nr.720。
- (15) 一九四〇年六月二二日付シヨット(ペドリード)宛アンフーン電報、DDI IX, 5, No.8。
- (16) 一九四〇年六月二三日付シユネーター電報、ADAP D IX, Nr.423。
- (17) 当時のスペイン内相セラノ・スニエールのインタビューの録音、Helena Saña, *El franquismo sin mitos—conversiones con Serrano Súñer*, Barcelona 1981, p.170。
- (18) 一九四〇年六月一六日付無署名メモ、ADAP D IX, Nr.456。派遣されたのは航空大臣フアン・ゴロン將軍でも。
- (19) Franz Halder, *Kriegstagebuch des Generalobersten Halder*, bearbeitet von H.-A. Jacobsen, Bd.2, Stuttgart 1963, S.133-141, 145。



- (20) 一九四〇年一月一日付ムソリーニ・セラノ會談のメモ『DDI IX, 5, Nr. 660.』
- (21) 一九四〇年一月二〇日付ムソリーニ宛ビスマルク公使の報告に関するチャーノ報告『ebenda Nr. 758.』
- (22) この會談に関する史料は残念ながら不十分である。スペイン外務省では當該文書は「行方不明」とされている。Ramon Serrano Sñter, *Espagne 1931-1945*, Paris 1984, pp. 151-152; Saña, op. cit., p. 200. 元スペイン外相セラノは最初の回想録(ドイツ語版は *Zwischen Hendaye und Gibraltar*, Zürich 1948) の中で、この協定について沈黙している。彼は、ドイツの文書は戦争の混乱の中で破壊されただろうと希望的に観測していた。しかしそうではないことが判明すると、彼はのちに事実を認めた。(Serrano, *Espagne*, p. 152; Saña, op. cit., p. 200). ドイツの文書の状態はたしかに不完全ではあるが、基本的には協定を実証している。参照『ADAP D XI, Nr. 200-201.』同書(三九五頁)には、チャーノにより手を加えられ、一九四三年以後ドイツ語に再訳された秘密議定書も収録されている。多くの古い専門書ではドイツの首席通訳官パウ・シュミットの描写(Paul Schmidt, *Statist auf diplomatischer Bihne 1923-1945*, Bonn 1949, S. 500-503) が無批判に受け入れられてきた。しかしながらシュミットはビートルとフランコとの會談には同席しておらず、たんに外相會談に出席していたにすぎない。史料問題の詳細については、参照『Holst, a.a.O., S. 209-211.』
- (23) 一九四〇年一月二九日付藤井電報。National Archives and Records Administration [henceforth: NARA], SRDJ (日本の外交電報) p. 7.652.
- (24) Holst, a.a.O., S. 146-153.
- (25) 一九四一年二月七日付シュトラー電報『ADAP D XII, Nr. 28.』
- (26) 一九四一年二月二六日付ビートル宛フランコ書簡『ebenda Nr. 95.』
- (27) 一九四一年六月一日付シュトラー電報『ebenda Nr. 615.』
- (28) 一九四一年六月二二日付シュトラー電報『ebenda Nr. 671.』この時点以降の独西関係についてはルールの著作に詳細な叙述がある。
- (29) Saña, op. cit., p. 243.
- (30) 一九四二年一月四日付須磨電報『SRDI, p. 18.649.』
- (31) 日本の利益はアメリカ合衆国、カナダおよびラテンアメリカ諸国の多くでスペインにより代表された。しかしハワイではスウェーデンが、またイギリスおよびその全植民地・自治領ではスイスが代表した。逆に、日本においてはスイス

がアメリカ合衆国の利益を、アルゼンチンがイギリスとカナダの利益を、それぞれ代表した。太田一郎(編)『大東亜戦争——戦時外交』(鹿島研究所出版会、一九七一年)二〇—二三頁の一覽表を参照のこと。同書ではアメリカの日系人収容所での紛争をめぐるスペインの活動についても述べられている。五〇三—五〇四頁。

- (32) 一九四二年一月九日付須磨電報、外務省外交史料館、「大東亜戦争関係一件」第六三巻の四(以下「外務省」と略記し、巻の番号を記す)。このスパイ活動に関しては、さらに参照: Angel Alcázar de Velasco, *Memorias de un agente secreto*, Barcelona 1979; Domingo Pastor Petit, *Espías Españoles. Del pasado y del presente*, Barcelona 1979, pp.173-194. 若島久夫『情報戦に完敗した日本』(原書房、一九八四年)「近代戦史研究会(編)『日本近代と戦争』第三巻『情報戦の敗北』(RHP研究所、一九八五年)一九三—二〇二頁。Robert K. Wilcox, *Japan's Secret War. New York 1985*; Antonio Marguina Barrio, "TO", *espías de verbená*, in: *Historia* 16, Vol.32, 1978, pp.11-18; José Luis Gutiérrez, "Madrid lleno de espías", in: *Cambio* 16, 1.10.1978, pp.14-17; Alcázar de Velasco, in: *El País*, 20.9.1978, p.2.

- (33) スラスコの生涯については以下を参照: Alcázar de Velasco, *Memorias*; Angel Alcázar de Velasco, *Serrano Sñier en la Falanga*, Madrid 1941, pp.9-14; Angel Alcázar de Velasco, *La gran fuga*, Barcelona 1977, p.4; Pastor Petit, op. cit.; NHK『私は日本のスパイだった——秘密情報員スラスコ』一九八二年九月二〇日放送(以後Velasco-NHKと略)。Wilcox, op. cit., pp. 70-72. ドイツ国防軍防諜部による接触と教育については、参照: Velasco-NHK, Alcázar de Velasco, *Memorias*, pp.17-20; ders., *Los siete días de Salamanca*, Madrid 1976, pp.196-201; 一九四二年七月二二日付須磨電報、外務省六二一六。

- (34) 一九八九年五月六日付クレープス宛ベラスコ書簡。本稿の筆者はベラスコと五通の手紙および付録書類のやり取りを行った。筆者からベラスコへの質問書、一九八九年二月二七日、六月二七日、ベラスコの回答、五月六日、五月二〇日、七月七日。

- (35) この事件に関するスラスコ自身の描写として、参照: Alcázar de Velasco, *Los siete días. La gran fuga*, pp.14-44.

- (36) Velasco-NHK, Gutiérrez, op. cit., p.16; Alcázar de Velasco, *Memorias*, pp.20-22; 一九四二年七月二二日付須磨電報、外務省六三二一六。一九四四年末にスラスコはオーバーバイエルのヴェルムでもう一度ファウベルと会った。(Alcázar de Velasco, *Los siete días*, pp.201-202).

- (37) 一九三七年六月一八日付サラマンカ発外務省宛ファウベルの報告 "Zur politischen Entwicklung in Spanien", in:

- Auswärtiges Amt, Politisches Archiv (ドイツ外務省資料館) Politische Abteilung: Politische Beziehungen Spaniens zu Deutschland Januar 1937-Dezember 1937.
- (38) 一九八九年五月六日付クレープス宛ベラスコ書簡。
- (39) セラーノの証言 (Saña, op. cit., p.230) ベラスコの証言 (Gutiérrez, op. cit., p.16; Wilcox, op. cit., p.72); Alcázar de Velasco, *Memorias* のカバー; Sir Samuel Hoare, *Gentleman in besondrer Mission*, Hamburg 1949, S.116. (ただしこの二冊はベラスコの名字を挙げていない)。ホーアにも取扱いがいろいろはズレる参照: Serrano Súñer, *Zwischen Hendaye und Gibraltar*, S.268). 刑務所蜂起に関するベラスコ自身の著書 *La gran fuga* は彼のスパイ活動が明らかとなる前に出版された。ホーアの回想録の原題は *Ambassador on Special Mission*, London 1946. ただし、引用はドイツ語版による。
- (40) Velasco-NHK.
- (41) Saña, op. cit., p.230; 一九四二年七月二日付須磨電報、外務省六三二一六。須磨の電報は部分的にアメリカにより解読されていた。参照: NARA, Magic Summary (以下: MS) 一九四二年七月二五日付。この秘密資料に関しては以下の註(75)を見よ。
- (42) ベラスコの宣伝本を参照せよ、*Alcázar de Velasco, Serrano Súñer en la Falange*。ベラスコの仕事場には一九七八年になってもセラーノの大きな肖像画が飾られていた。この写真は *Marquina Barrio*, op. cit., p.13. に掲載されている。
- (43) セラーノもまた、七〇年代の終わりにおいてすアルカサル・デ・ベラスコを「良き友人」として信頼している。Pastor Petit, op. cit., pp.184-185. 戦争後にはセラーノは一時ベラスコに距離を置いていた。Serrano Súñer, *Zwischen Hendaye und Gibraltar*, S.268.
- (44) Michael Bloch, *Operation Willi*. London 1984, pp.146-162. を参照。なお、これに関しては *Walter Schellenberg, Aufzeichnungen des letzten Geheimdienstchefs unter Hitler*. Göttersloh 1981, S.137-144. にも短く紹介されている。
- (45) Saña, op. cit., pp.230-231, 234; Serrano Súñer, *Zwischen Hendaye und Gibraltar*, S.268-269; Alcázar de Velasco, *Memorias*, pp.37-44, 62-66. このエピソードについてはホーアの回想録の中には記述がないが、ホーアがそこで憎しみを込めてベラスコを叙述している (二一六頁) のは、後に発覚した裏切りのせいかもしれない (セラーノ・スニエールも同様の推測をしている。Serrano Súñer, *Zwischen Hendaye und Gibraltar*, S.269.)。
- (46) 一九八九年五月六日付クレープス宛ベラスコ書簡。

- (47) Bloch, op. cit., p.155.
- (48) Velasco-NHK; Alcázar de Velasco, *Memorias*, pp.82-154.
- (49) これに関するイギリスの見方については MS 一九四三年一月二四日付; Kim Philby, *Mein Doppelspiel*, Gutersloh 1968, S.72-73; Sefton Delmer, *Die Geisterarmee oder die Invasion, die nicht stattfand*, München 1972, S.65; Miguel West, *MI 5. British Security Service Operations, 1909-1945*, London 1983, pp.180-181; ders., *MI 6. British Secret Intelligence Service Operations, 1909-1945*, London 1983, p.184; F.H. Hinsley and C.A.G. Simkins, *British Intelligence in the Second World War. Vol.4: Security and Counterintelligence*, London 1990, pp.107-110. スミス自身は彼のロンドンの活動を成功だいたく考えている。(Velasco-NHK; Wilcox, op. cit., p.72; Alcázar de Velasco, *Memorias*, passim).
- (50) 一九八九年五月六日付クレイプス宛ベラスコ書簡。
- (51) 一九三九年一〇月一九日及び一九四〇年九月一〇日付シユトーラー電報。ADAP D VIII, Nr.284 und D XI, Nr.39.
- (52) 一九四二年七月二日付須磨電報, 外務省六三一六。
- (53) これに関しては、参照 Delmer, op. cit.; Ewen Montagu, *The Man Who Never Was*, Lippincott 1965; ders., *Beyond Top Secret Ultra*, New York 1977; John C. Masterman, *The Double Cross System in the War of 1939-1945*, New Heaven 1972; Anthony Cave Brown, *Die unsichtbare Front*, München 1976; Pastor Petit, op. cit.
- (54) Philby, op. cit.
- (55) セラーノの活動は、たとえば以下の須磨の電報からも明らかとなる。一九四二年一月九日付および七月二二日付、外務省六三一四、および一九四二年四月一五日付、外務省六三一六、MS 一九四二年四月三〇日及び五月一〇日付。一九七八年のインタビューでベラスコは、ある人物からの電話によりロンドンから召還され、須磨とコンタクトをとったと述べている(ベラスコはこの人物の名を挙げるのを避けている)。El País, 20.9.1978. 一九四二年一月九日付須磨電報によればそれがセラーノであることは明白である。
- (56) Sana, op. cit., pp.230-242. 別の場所でセラーノは、概略次のような留保つき発言をしている。「私はスパイ組織についてはわずかな知識しかなかった。それは友人でありまた諜報員でもあるベラスコから得た情報によるものである。私自身はベラスコを須磨に紹介したことはなく、ただあとから二人の関係を既成事実として知ったにすぎない」。Pastor Petit, op. cit., p.184-185.

- (57) Gutiérrez, op. cit., pp.15-17. 別のインタビューでセラノはベラスコから「事情を知らされていた」とされている。  
Pastor Petit, op. cit., p.180.
- (58) ベラスコのインタビュー 'El País 20.9.1978.
- (59) Ebdenda; Gutiérrez, op. cit., p.16; Pastor Petit, op. cit., p.180.
- (60) 一九八九年五月六日付クレープス宛ベラスコ書簡。
- (61) 例えば、SRDJ, p.18.463, 18.492.
- (62) 一九四一年二月二八日付須磨電報、SRDJ, p.18.462.
- (63) 一九四二年一月五日付須磨電報、SRDJ, p.18.747.
- (64) 当時のマドリード駐在一等書記官三浦丈夫のNHKインタビューでの発言によると、「to」は「盗」を意味したが、のちには、もう少しましな意味で同音の「東」が充てられた。須磨自身は第一回の報告の中でベラスコとの会談を「東」と記している。(一九四二年一月八日付須磨電報、SRDJ, p.18.736)。この文書は、ベラスコの名前が文書の機密解除の前に削除されていなかった二、三の例外のうちの一つである。おそらくケアレシミスであろう。外務省に保存されている文書では「東」のみが記されている。「戸」の意味での誤訳はおそらくベラスコにより流布されたものであろう。多くの出版物で誤って「戸」の意味と与れている。Marguina Barrio, op. cit., p.12; Gutiérrez, op. cit., p.14, 16; Pastor Petit, op. cit., p.174; Alcazar de Velasco, Memorias のカバー; Wilcox, op. cit., p.21, 83.
- (65) SRDJ, p.8.705.
- (66) 三浦のNHKでの発言。ベラスコによれば、三浦は一九四一年八月、つまり真珠湾攻撃の四か月前に、ドイツ国防軍防諜部の仲介により、協力関係を形成する目的でベラスコにコンタクトを求めてきたという。
- (67) Velasco-NHK.
- (68) 一九四二年一月四日付須磨電報、SRDJ, p.18.645.
- (69) 一九四二年一月五日付須磨電報、SRDJ, p.18.747.
- (70) 一九四二年一月四日付須磨電報、SRDJ, p.18.645.
- (71) SRDJ, pp.18.571-578, 18.645, 18.648. この記録されているが、不完全かつ断片的で、部分的に省略もおこなわれている。
- (72) 一九四二年一月八日付須磨電報、SRDJ, pp.19.030-031.

- (73) 一九四二年一月八日付須磨電報、SRDI, p.18.736.
- (74) 一九四二年一月九日付須磨電報、外務省六三—四。SRDI, p.18.924. 要約はMS 一九四二年八月二八日付。
- (75) たとえば一九四二年一月九日の須磨電報の原文とアメリカの傍受資料とを比較すれば、ベラスコの名前がアメリカ政府当局により抹消されていることが分かる。外務省六三—四、SRDI, p.18.924. 要約はMS 一九四二年八月二八日付。一九七八年にアメリカ合衆国により解禁された文書は、ワシントンの国立公文書館に移管された。これらの文書は秘密資料からの抜粋であり、戦争中毎日作成された「マジック・サマリー」の中に存在している。「マジック・サマリー」は一九四四年に「マジック外交サマリー」と名称変更された。なお、この資料は一九九三年になって初めて全文公開された。
- (76) 一九八九年五月六日付クレープス宛ベラスコ書簡。
- (77) 一九四二年七月二日付須磨電報、外務省六三—六；SRDI, pp.24.952-954.
- (78) 一九四二年一月九日付須磨電報、外務省六三—四。部分的にアメリカに知られていた。MS 一九四二年四月三〇日付参照。
- (79) インタビュー、*El País* 20.9.1987.
- (80) 一九四二年一月一六日付須磨電報、SRDI, pp.19.065-066.
- (81) 一九四二年一月一〇日付須磨電報、SRDI, pp.19.177-178.
- (82) 一九四二年一月三〇日付須磨宛外務省電報、SRDI, pp.19.774, 19.789, 19.818.
- (83) 一九四二年三月三〇日及び四月一五日付須磨電報、SRDI, pp.21.312, 22.086-087.
- (84) 一九四二年四月一六日付須磨電報、外務省六三—五；SRDI, pp.22.086f. この電報を盗聴したアメリカの文書は多くの誤訳を含んでいるが、ベラスコの名前は抹消されていない。おそらくケアレスマスであろう。
- (85) 一九四二年六月一〇日付須磨宛東郷電報、SRDI, p.23.700.
- (86) 一九四二年六月一日付須磨電報、SRDI, p.23.619.
- (87) 一九四二年六月二日付ワシントン発「東」情報を含む一九四二年六月一四日付須磨電報、SRDI, pp.23.792-793.
- (88) 一九四二年四月一六日付須磨電報、MS 一九四二年四月二二日及び五月一日付、外務省六三—五、SRDI, pp.22.251-254; 2.5.1942, SRDI, p.22.191; 24, 25.5.1942, 外務省六三—六；18.6.1942, SRDI, pp.24.555-360.

- (88) Velasco-NHK. 戦争の場合アメリカ合衆国から情報を獲得し、メキシコを経由して転送する方法は、次の史料から推測し得るように、すでに一九四一年夏に当時のメキシコシティ駐在日本公使三浦義秋(三浦文夫とは別人)により準備されていたようである。一九四一年七月四日、五日、八日および二三日の三浦電報、外務省六三一一。さらに傍受された三浦の電報をも参照。U.S. Department of Defence, *The "Magic" Background of Pearl Harbor, Appendix II*, Washington 1978, No.384, 393, 399-419. Gerhard Krebs, "The Spy Activities of Diplomat Terasaki Hidenari in the USA and his Role in Japanese-American Relations," in: Ian Neary (Ed.): *Leaders and Leadership in Japan*. Richmond/Surrey 1996, pp.190-205, 参考。
- (90) 一九四二年七月二日付須磨電報、外務省六三一一六。基本的にMS一九四二年七月二五日付にも収められているが、ベラスコの名前は抹消されている。外交官のなかの協力者はワシントン駐在武官フェルナンド・ゴンサーレス・カミーモおよびニューヨーク総領事ミゲル・エスピノス、ニューオーリンズ総領事ホセ・マリア・ガライ、サンフランシスコ総領事フランシスコ・アマトであった。Gutiérrez, op. cit., p.15.
- (91) サンチャゴ経由の方法はベラスコのNHKインタヴューおよび多くのマジック文書により確認されるが、ペロンが日本のスパイ活動に直接に関わった証拠はない。ペロンは一九三〇年代にチリ駐在武官として枢軸諸国のためにスパイ活動を行っていたが、ベラスコの推定とは異なり、太平洋戦争中はもはやチリにはいなかった。ベラスコはしばしばペロンを須磨の活動と結びつけており、さらに、ペロンは日本人から莫大な報償を受けたと主張している。Gutiérrez, op. cit., p.17; Alcázar de Velasco, *Memorias*, pp.46-47, 182, Pastor Petit, op. cit., p.182, 190; Wilcox, op. cit., p.83, 134.
- (92) 一九四二年八月二日付須磨電報、外務省六三一一六、SRDI, p.25814.
- (93) マジック資料による額を合計すると約五〇万ドルになる。
- (94) Velasco-NHK.
- (95) 一九四二年二月三日付須磨電報、MS一九四三年一月八日付。
- (96) 一九四二年二月二日付須磨宛外務省電報、SRDI, p.29838.
- (97) MS一九四三年一月三日付。現存文書を見る限りでは、その後一年間、須磨も日本外務省もこの問題に言及した形跡がない。ようやく一月一日になって、重光外相が須磨に、旧ワシントン駐在日本大使館の現金について何らかの処理をおこなったのかと問い合わせている。一月二四日に須磨は、スペイン外務省次官からの情報として次のよう

に伝えている。「スペイン外務省からアメリカ合衆国駐在スペイン大使館にこの問題で必要な訓令を与えるには、今まで安全な方法がなかった。しかしこの件に関しては電報で訓令を与えることが必要となるだろう」。須磨によれば、スペイン側は、日本の利益を代表するための資金の出所をアメリカ政府に伝えなければならぬことに頭を悩ませているのであった。MS 一九四三年一月三〇日付。

- (98) 一九四三年一月六日付須磨宛谷電報、SRDJ, pp.30.065-066, MS 一九四三年一月一日付。
- (99) 一九四三年一月九日付須磨宛谷電報、SRDJ, p.30.921.
- (100) MS 一九四三年一月五日及び二月七日付、SRDJ, pp.30.065-066.
- (101) MS 一九四三年五月三日、二月一日五日及び一九四三年五月二日付。一九四二年一月二七日付須磨電報、SRDJ, p.28.296. それによるとカバンはバミューダ諸島でイギリス・アメリカ当局によって非合法的に開封され、中のものが抜き取られた。
- (102) 一九四二年一月二六日付須磨宛谷電報、SRDJ, p.28.579.
- (103) 一九四二年一月一七日付須磨電報、SRDJ, p.28.296.
- (104) MS 一九四三年六月二日付。
- (105) MS 一九四二年二月二五日付。
- (106) Hans Jürgen Wirthöft, *Die deutsche Handelsflotte 1939-1945. Unter besonderer Berücksichtigung der Blockadebrecher*. Bd. II Göttingen 1971, S.4748. MS 一九四三年二月一四日付の報告は、日付は正しいが、沈没の経過については必ずしも正確ではない。この船は一九四二年九月に横浜を出航した。
- (107) 一九四三年一月七日付大島宛谷電報、SRDJ, p.30.247.
- (108) 一九四三年一月四日付大島電報、MS 一九四三年二月一四日付。
- (109) 一九四二年二月三日付須磨宛外務省電報、SRDJ, p.18.374.
- (110) 一九四二年一月三一日付須磨電報、SRDJ, p.19.491.
- (111) 一九四二年三月二日付大島電報、SRDJ, p.20.612.
- (112) 一九四二年八月一日付須磨宛東郷電報、SRDJ, p.25.724.
- (113) 一九四二年八月二七日付須磨電報、SRDJ, p.26.259.



- (114) 一九四二年七月六日付須磨電報、SRDJ, p.24,597.
- (115) MS 一九四三年五月一日、五月一〇日、七月八日、七月二十六日及び九月二八日付。さらに、参照、須磨弥吉郎「須磨情報秘話」、「文芸春秋」一九五〇年二月号、二二八—二三〇頁。
- (116) MS 一九四三年一月五日、一月二二日、一月二八日及び二月五日付。
- (117) MS 一九四二年七月十七日付。
- (118) MS 一九四二年一月二五日付には「東」情報と実際のデータの比較一覧表がある。
- (119) 一九四二年八月三日付須磨電報（八月三日付ニューヨーク発「東」情報）、MS 一九四二年八月一五日付。
- (120) 一九四二年八月二〇日付須磨電報、外務省九。ニューヨーク発「東」情報、SRDJ, p.25,761, MS 一九四二年八月二二日付。
- (121) 一九四二年八月二八日付須磨電報（八月二三日付ニューヨーク発「東」情報）および八月二二日付須磨電報（八月二九日付ニューヨーク発「東」情報）、外務省九。電報の大部分は次に収められている。MS 一九四二年八月二二日、八月三〇日及び九月二日付。
- (122) ガダルカナル作戦および日本の偵察活動をめぐる怠慢について、岩島前掲書二二九—二三一頁、一三九—一四二頁および近代戦史研究会（編）前掲書一九三—二〇二頁の稲垣武の論文を参照せよ。
- (123) 須磨「情報秘話」一三二頁。
- (124) 一九四二年八月七日付須磨電報（ニューヨーク発「東」情報）、八月一三日及び八月三一日付須磨電報（八月二九日付ニューヨーク発「東」情報）及び同年一〇月二二日付須磨電報、一九四三年一月八日付須磨電報（一月七日付ワシントン発「東」情報）。これらはMS 一九四二年八月九日、八月二五日、九月二日、一〇月二六日及び一九四三年一月二二日付に所収。一九四二年八月三一日付須磨電報は外務省九にも存在する。
- (125) 一九四二年二月二三日付須磨電報、SRDJ, p.30,281.
- (126) 外務省から須磨への訓令を見よ、MS 一九四二年一月七日及び一九四三年一月二〇日付。（一九四三年一月二五日付谷外務大臣須磨宛）
- (127) 須磨は、またもや不注意にも電報で工作員の名前を挙げているが、アメリカのマジック・サマリー資料では名前その他の詳細は抹消されている。一九四二年一〇月一六日及び一〇月二二日付須磨電報、MS 一九四二年一〇月二二日及び

- 一〇月二七日付。しかし以下の史料には名前が記されている。SRDI, p.20,967, pp.27,246-247.
- (128) 一九四二年一〇月一六日付須磨電報 SRDI, pp.27,246-248.
- (129) 一九四三年三月四日付須磨電報 SRDI, p.32,279.
- (130) 一九四二年一月六日付駐マドリドアメリカ大使ヘイズ電報, MS 一九四三年一月二日付。アルカサル・テ・ベラスコは、コッペに諜報任務を委ねるといふ須磨が発案した考えに反対したという。Alcazar de Velasco, *Memorias*, pp. 182-186. ベラスコへのインタビュに大幅に依拠しつつこの事件を叙述したものと、参照 *El País*, 20.9.1978; Pastor Petit, *op. cit.*, p.180; Gutierrez, *op. cit.*, pp.15-17; Wilcox, *op. cit.*, pp.127-134. しかし一九四二年一〇月一六日の須磨電報によれば、ベラスコはこの任務のためコッペを採用できたことを非常に喜んでゐる。SRDI, pp.27,246-248.
- (131) 一九四二年一〇月二六日付須磨電報, MS 一九四二年一〇月三〇日付。
- (132) 当時この計画の責任者であった元陸軍大佐川嶋虎之輔へのインタヴュー, NHK前掲プログラム, および川嶋の発言、読売新聞社編『昭和史の天皇』第四巻(読売新聞社、一九六八年) 八四頁。
- (133) Velasco-NHK. ベラスコの回想録での主張(一六八―一七二頁)によれば、彼は一九四三年六月にベルリンのヒトラーの許に呼ばれ、アメリカの原子力研究の現状について直接報告したという。しかしこの主張は、彼の回想録の多くの他の部分と同様、疑つてかかる必要がある。「熱帯医学者アルバート・シユヴァイツァーも私のスパイ組織に所属しており、私自身、ランバレネ(フランス領ガボン)に三回シユヴァイツァーを訪ね、重要な会談を持った」といふベラスコの主張(本稿の筆者への一九八九年五月六日付書簡)も信用するに値しない。

(ゲルハルト・クレープスIIベルリン自由大学客員教授)

(たじま・のおおII本学教授)

(いで・なおきII本学大学院法学研究科博士後期課程)